

## 大学生のAIDSに関する知識

著者	杉原 洋子, 角川 正樹
雑誌名	比較文化
号	4
ページ	162-170
発行年	1998
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1106/00000641/">http://id.nii.ac.jp/1106/00000641/</a>

## 大学生のAIDSに関する知識

クロスカルチュラル・スタディー :

日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生

杉原洋子\* 角川正樹

この論文は、日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生のもつAIDSに関する知識の比較をとりあげたものである。大学生の間でのAIDSに関する知識を知るために英語と日本語の質問紙が作成された。206人の日本人大学生と186人のメキシコ系アメリカ人大学生がこの調査に参加した。調査の結果、日本人の大学生の方がメキシコ系アメリカ人大学生よりもAIDSに関する知識は優れていることがわかった。違いとしては、日本人大学生はAIDSに関するテクニカルな知識に欠け、メキシコ系アメリカ人大学生はAIDSの感染ルート、予防に関する誤った概念を持っていることがわかった。最後に、多文化社会でのAIDSに対する予防措置や教育を行う上での問題点を論じる。

The knowledge of AIDS/HIV among Japanese and Hispanic college students was examined. English and Japanese versions of questionnaires were developed to ask knowledge of AIDS/HIV. Two hundred six Japanese college students in Japan and 186 Hispanic college students in the United States participated in this study. The results indicated that Japanese college students were more knowledgeable than Hispanic college students on AIDS/HIV. Japanese college students lack technical knowledge about AIDS/HIV, whereas Hispanic college students have a confused set of misconception about AIDS/HIV transmission and misconceptions about prevention methods. Implications for prevention for Hispanic and Japanese people in multicultural society were also discussed.

### 序

AIDSの流行は人種、民族、社会階層を超えて世界中の国の人々に影響を与えている (McCoy & Inciardi, 1995; Schneider & Stoller, 1995; Sweat, M. & Levin, M., 1995)。メディアを通じての予防や教育がさまざまな方法で行われてきたが、AIDSの知識の程度や危険な性行動でリスクを負う割合は人種間でまた国々によって異なっている (Romero & Arguelles, 1993; Wright, 1995)。文化が多様化している現在、それぞれの国でのAIDSに関する知識や考え方についての調査を行うことにより、その国の事情に応じた多種多様なレベルでの予防措置の考案と実践が必要となっている。

アメリカでは違った人種間でのAIDSの知識の差に関する研究が実施されてきた (Rapkin & Erickson, 1990; Flasherud & Nyamathi, 1990; Aruffo et al, 1991; Diaz, et al., 1993; Sweat & Levin, 1995; Romero & Arguelles, 1993; Epstein et al, 1994)。しかし、AIDSの知識に関する文化間での違いはほとんど研究がされていない。国際化が進み、民族や文化間の交流が進んでいる現代社会で、AIDSの予防や治療をしていく上に、文化の違いがいかに私たちの持つAIDSの知識に

影響してくるかを知っておくのは、大切なことである。この論文では、文化的な類似点が多くみられるメキシコ系アメリカ人と日本人のAIDSに関する知識の差を調べてみる。

北アメリカの国々では、1970年代にAIDSが流行し始め、年々増加傾向をたどっていた (McCoy & Inciaridi, 1995)。数多くの専門分野を超えた研究がなされ、完治法がまだ発見されていないことから、多様な予防措置が考え出され、危険な性行動の削減が図られてきた。これらの研究や対策の成果が実ったのか、昨年のAIDSケースは前年度に比べ、初めて減少傾向をみせはじめた (CDC, 1997)。日本では最近になって、薬害AIDSの流行が取り上げられ、大きな社会問題になった。これとともに、日本ではAIDS流行の実態が調査され、予防や市民の教育、また、治療などが行われている (保険衛生ニュース, 1996)。

アメリカでのAIDSの流行期間が長いこと、予防や治療が多面的に1970年以来行われてきていることから、メキシコ系アメリカ人大学生のほうがAIDSに関するニュースや問題に触れることが多く、日本人大学生よりもAIDSに関する知識は豊富であると考えられる。

### メキシコ系アメリカ人の中でのAIDS/HIV

メキシコ系アメリカ人はアメリカの全人口の一割を占めている。1995年の Center for Disease Control (CDC, 1995) の報告ではアメリカでのAIDSケースの17パーセントがメキシコ系アメリカ人である。メキシコ系アメリカ人の大人や青少年の間ではAIDSケースの83パーセントが男子で占められている。彼らの中での主な感染ルートは、HIV陽性のドラッグ使用者間での皮下注射器用のニードル交換 (39%)、男性どうしでの性行為 (38%)、異性間、またはバイセクシュアル間での皮下注射器用のニードル交換 (6%) となっている。もう一つの傾向としては、マイノリティーの女性の間でAIDSケースが年々増えていることである (Stein, 1995; Kaplan, 1995)。女性は全国のAIDSケースの11パーセントを占めている (CDC, 1995)。この中で、メキシコ系アメリカ人女性は、一般人口に対する割合を遙かに超えた29パーセントを占めている (Romero & Arguilles, 1993)。またメキシコ系アメリカ人女性のAIDSケースの74パーセントが異性間の性行為によるものであるという報告もされている (CDC, 1995)。

### 日本人の中でのAIDS/HIV

日本でのAIDS/HIVに関する研究は極めて少ない。厚生省の発表(読売新聞、1998)によると、日本のエイズ患者数は1988年以降、年々増加をつづけている。最近、日本のメディアは、日本政府が血友病患者に対する警告を怠ったために、約1800人の日本人がアメリカから輸入された血液でAIDSに感染したと伝え、日本での薬害エイズの感染状況を報告した。

1996年の厚生省の報告 (健康保険ニュース, 1996) によると、1,227のAIDSケース (男性—1,140; 女性—87) が報告されていて、HIV陽性のケースは3,642 (男性—2,746; 女性—894) で、全国での死亡者は749人に達していた。地域的に見ると、約70パーセントのケースが関東地方で報告されている。四月、五月に新規に報告された112のケースのうち7

4人は日本人で、残りの38人は外国人だった。主な感染法は異性のパートナー(53)、同性愛の経験(21)、ドラッグの使用(1)、そして母子間の感染(2)であった。感染場所は、56人が日本で感染しており、28人が外国で、残りの18人は不明であった。メディアでは薬害AIDSが社会問題として脚光を浴びている一方では、日本の研究者は性交渉から伝染する性病とともにAIDSやHIVの流行を暗示した。

## 方法

### 手順

既成の質問紙をもとにして(Write, 1991; Vener & Krupka, 1990)、20問からなるAIDSに関する質問紙が英語と日本語で作られた。アメリカでは、データは、1996年の秋、南テキサスにある大学のキャンパスで収集された。同時期に、日本では関東地方の大学の学生が質問紙に答えた。この調査の性質上、個人の秘密を守るために、この質問紙には名前を書かないように指示がされた。データ処理はtテストをつかってなされた。

### 研究対象

186人のメキシコ系アメリカ人大学生(女性—135;男性—51)がこの調査に参加した。メキシコ系アメリカ人大学生の平均年齢は19.2歳(SD=1.57)、性別の平均年齢は女性が19.1歳(SD=1.52)、男性が19.6(SD=1.57)であった。

日本では206人の日本人大学生が質問紙に答えた。日本人大学生の平均年齢は19.56(SD=1.38)、男女別の平均年齢は、女子が19.22(SD=1.02)で、男子は20.09(SD=1.68)であり、メキシコ系アメリカ人大学生と日本人大学生の二つのグループは年齢的には差異が認められなかった( $t=0.002$ )。

### 質問紙

20問からなるはいいいえのAIDSに関する質問紙が既成の質問紙をもとにつくられた(Write, 1991; Vener & Krupka, 1990)。20の質問は病気としてのAIDS、感染ルート、そして予防措置の分野をカバーしたものであった(テーブル1参照)。英語の質問紙は両国語を話す研究者により日本語に直され、日本のもう一人の研究者が再度チェックをして最終的に日本語版の質問紙が制作された。各質問の正解が1点としてそれぞれの分野で集計されると同時に、質問紙全体のスコアも計算された。質問紙の信憑性(Split-half reliability)は英語版が0.81で、日本語版が0.76であった。

## 結果

病気としてのAIDSの分野では、日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生との間に違いが認められた(テーブル 1 参照)。日本人大学生はメキシコ系アメリカ人大学生に比べて、AIDSとHIV陽性の区別ができずに( $p < .01$ )、AIDSの完治方法がまだないことを知らなかった( $p < .001$ )。一方、メキシコ系アメリカ人大学生は感染方法に関して誤った考え方をしていた。彼らはトイレの便座や握手などのカジュアルなコンタクトからAIDSが感染する可能性があると考える傾向があった( $p < .01$ )。同時に、同性のパートナーとの性行為か、感染している人との性行為からのみAIDSが感染すると信じていた( $p < .01$ )。さらに、メキシコ系アメリカ人大学生には、AIDSは主に性的に活発な人( $p < .01$ )や、危険度の高い性行為をしている人( $p < .05$ )のみがかかるものだと思う傾向がみられた。

予防に関する知識においても日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生の間に差が認められた。メキシコ系アメリカ人大学生はラテックスコンドームが一般的に効果的な予防方法であること( $p < .01$ )や、安全な性行為について話し合うのは性的な接触が起きる前であること( $p < .05$ )に気がつかなかった。一方日本人大学生はドラッグを打つ時に使用した注射針は強い洗剤で洗えば危険はないと信じる傾向があった( $p < .05$ )。

全面的にみて、結果は日本人大学生のほうがメキシコ系アメリカ人大学生に比べて正解率が高く( $p < .05$ )、日本人大学生のほうがAIDS/HIVに関しては正確な知識を持っていることがわかった(テーブル 2 参照)。

男女別に見ると、いくつかの点で差はあったが、全般的なAIDS/HIVの知識については日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生の間に差はみられなかった(テーブル 2 参照)。違いとしては、日本人女子大学生はAIDS治療に関して( $p < .01$ )、AIDSとHIVの違い( $p < .01$ )、皮下注射器用ニードル使用の危険性( $p < .01$ )などの知識に欠け、一方では、メキシコ系アメリカ人女子大学生はAIDSは性的に活発になることによって( $p < .01$ )、感染している人との性交渉( $p < .01$ )、また同性との性交渉( $p < .05$ )により感染すると信じる傾向があった。また、メキシコ系アメリカ人女子大学生はラテックスコンドームがAIDSの予防に効果的であるという認識に欠けていた( $p < .01$ )。

男子大学生では、日本人は病気としてのAIDSの知識に欠け、メキシコ系アメリカ人は性交渉の危険性や予防対策などの知識に乏しかった。日本人男子学生はAIDSとHIV陽性の区別がわからず( $p < .01$ )、メキシコ系アメリカ人男子学生はAIDSは主にAIDSに感染しているパートナー( $p < .01$ )か、同性のパートナー( $p < .01$ )との性交渉により感染すると信じ、危険な性行為をすることによって( $p < .01$ )、また性的に活発になることによって( $p < .01$ )のみAIDSが感染すると思っている傾向があった。また、メキシコ系アメリカ人男子学生は安全なセックスの実践( $p < .01$ )や、ラテックスコンドームの予防効果( $p < .01$ )を認識していなかった。

日本人とメキシコ系アメリカ人のグループ内でのAIDS/HIVの知識度における男女差はみられなかった。

テーブル 1

質問紙にみる日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生の持つ

エイズに関する知識の相違

	日本人大学生 メキシコ系アメリカ人大学生	
	(N = 206)	(N = 186)
	Correct (percentile)	Correct (percentile)
<b>病気としてのAIDS/HIV</b>		
HIV陽性とAIDSの違い	38 (18)	142 (76) **
AIDSの完治	176 (85)	175 (94) **
<b>感染ルート</b>		
咳やくしゃみ	199 (97)	182 (97)
キス	190 (92)	175 (94)
知人がAIDSに感染している	194 (94)	181 (97)
便座、握手、社交でのコンタクト	187 (91)	150 (80) **
感染している人との性交渉	182 (88)	135 (71) **
同性愛者または両性愛者との性交渉	200 (97)	175 (94)
性的に活発になる	198 (96)	106 (57) **
同性との性交渉	201 (98)	170 (91) **
危険な性行為(肛門性交)	196 (95)	165 (90) *
輸血	184 (89)	169 (90)
人口受精	112 (54)	98 (52)
感染している母親から体内の子供へ	200 (97)	176 (94)
献血	119 (58)	92 (49)
<b>予防</b>		
安全なセックス	186 (90)	149 (80) **
ラテックスコンドーム	195 (95)	143 (76) **
石鹸と熱い湯で洗淨	204 (99)	183 (98)
性行為前の話し合い	201 (98)	167 (89) **
皮下注射機のニードル洗淨	168 (82)	169 (90)

\*\* p &lt; 0.01, \* p &lt; 0.05

テーブル 2

## 日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生の持つ

## エイズに関する知識の相違

	日本人大学生	メキシコ系アメリカ人大学生	
合計	(n = 206)	(n = 186)	
Mean (SD)	17.19 (1.5)	17.38(1.68)	**
女性	(n = 126)	(n = 135)	
Mean (SD)	17.08 (1.74)	16.77 (2.02)	
男性	(n = 80)	(n = 51)	
Mean (SD)	17.38 (1.68)	16.33 (1.79)	**

\*\* p &lt; .05

## 結論

この論文では日本人大学生とメキシコ系アメリカ人大学生のAIDS/HIVに関する知識が調べられた。調査に参加した日本人大学生のほうがメキシコ系アメリカ人大学生よりもAIDS/HIVに関する知識を持っていることがわかった。また、これらのグループはそれぞれ違った意味でAIDS/HIVに関する知識に欠けていることがわかった。日本人大学生はAIDSとHIV陽性の違いがあやふやで、AIDSの治療、皮下注射器用ニードル使用の危険性に関して知識が欠けていた。皮下注射器用ニードル使用の危険性に関して知識が欠けていることに関しては、日本では比較的ドラッグの法律規制がいきとどいていて、法律で規制されているドラッグが一般に出回っていないことが関係しているのではないかと考えられる。普通の大学生が法律で規制されているドラッグを手に入れ、使用する可能性はアメリカに比べてずっと少なく、ドラッグは日本人大学生の生活の中では大きな割合を占めてはいないようである。

さらに、日本人大学生はAIDS/HIVに関するテクニカルな知識に欠けていた。日本ではAIDS/HIVに関する教育や予防対策が現在すこしずつできつつある段階で、まだAIDS/HIVに関する知識が一般的に行き渡っていないのであろう。日本でも市役所、保健所などではAIDSに関するパンフレットを配り市民教育にあたり、保健所ではHIVテストを行っている。これらの予防対策にもかかわらず、アメリカでのAIDSの新規ケースが頭打ちなのに比べて、日本では1998年の厚生省のエイズ動向委員会の報告(読売新聞、1998)によると、新しく登録されたAIDSケースの数は昨年よりも増えている。また輸血からAIDSに感染したケースが問題になった1996年に比べて、1997年は20才代の女性、と30才代の男性の間でのAIDSの急激な増加傾向がみられ、感染ルートも輸血用血液から異性間の性行為への移行がみられた。また、以前は外国で感染している例が多かったのに比べて、国内感染の

増加が著しくなっている。この報告は日本でのAIDS流行の始まりを告げているようである。これに伴い、日本では更に徹底したAID/HIVの予防、教育が、特に青少年に向けての教育が重要な課題になってくるだろう。一方では、メキシコ系アメリカ人大学生はAID/SHIVに関する一連の誤った考えを持っていた。彼らは他の人とのカジュアルなコンタクトでAIDSが感染すると信じる傾向があった。すなわち彼らはAIDSがウイルスなどから感染する(infectious)病気ではなく空気感染する(contagious)病気であると思っていた。これは他の調査結果とも一致している(Meril, 1989; Epstein et al., 1994)。いっぽうでは、彼らは感染している人とか、同性同士で性交渉をしたり、性的に活発でなければ、AIDSには感染しないと信じていた。メキシコ系アメリカ人大学生はAIDSがウイルスなどから感染する病気であると同時に空気感染性があると思っている傾向があるようだ。

さらに、メキシコ系アメリカ人大学生は安全なセックス(safer sex)をすることと、ラテックスコンドーム使用が効果的なAIDS予防対策であるという認識に欠けていた。メキシコ系アメリカ人はほとんどがカソリックであり、コンドームの使用は彼らの宗教的な教えと相反するものなのかもしれない。また、彼らがAIDSは空気感染性があると信じているということをつまめると、彼らのAIDS予防措置に関する認識不足が説明できるであろう。もしAIDSに空気感染性があるならば、コンドームの使用や安全なセックスの実践(safer sex practice)は意味がなく、無用なものである。

メキシコ系アメリカ人が同性同士での性行為が主な感染ルートと考えているのは、メキシコ系アメリカ人男性の間でのAIDS感染は主に皮下注射器用ニードル使用からくるものであるという事実(Diaz et al., 1993)に由来しているとも考えられる。

AIDS/HIVに関する知識は文化的な要因にも左右されてくる。それぞれの文化はその文化特有の考え方を保持している。日本文化もメキシコ文化においても性に関することを公の場で話題にするのはタブーとされている。メキシコ文化はさらにカソリックの影響が強く、避妊用の道具を使ったり、避妊をするのは宗教の教えに反している。この事実がメキシコ系アメリカ人のAIDS予防に関するある種の知識不足またある種の予防方法を避けることに関係があるのではないだろうか。

もう一つ考えなければいけないのが言葉の問題である。この調査に参加したほとんどのメキシコ系アメリカ人がバイリンガルで、家ではスペイン語を話していることから、彼らのAIDSに関する情報が限られていたのかもしれない。一方では、日本は単一文化、言語の国であり、情報がマスメディアその他を通じて、全国に行き渡るのは容易である。

メキシコ系アメリカ人はアメリカのなかでも増加の著しい人種のひとつである。メキシコ系アメリカ人はまた人口比に比べて、最もAIDSの感染者が多くなっている(Deaz et al., 1993)。AIDSに関する知識があるからといって、それが直接われわれの行動を変えることに結びつくとは限らないが、AIDSに関して一般市民を教育していくのは、危険な性行動を減らすという意味においては、行動変化の第一歩とみななければならないだろう。特にメキシコ系アメリカ人がAIDSに関して誤った知識を持ち、AIDSは風邪やインフルエンザのように空気感染性があると思っていたら、コンドームがAIDSの予防効果があるとは思わないであろうし、コンドームを使うこともないであろう。



また、アメリカでは、家庭で英語を話さない人たちの間では、マスメディアからの情報が限られていて、AIDS/HIVの知識が乏しかったり、誤った知識をもっているという調査結果がでている。マスメディアはAIDS/HIVの主要な情報源であるとされているが(Epstein et al., 1994), アメリカ文化に同化し(acculturate)している人ほどマスメディアから知識を得、同化して(acculturate)いない人は医者やクリニックからAIDS/HIVについて学ぶ傾向がある(Epstein, et al., 1994)。アメリカでは、現在でも移民が増えつつあり、新移民は同人種で形成されるコミュニティで自分たちの言語を話し、生活する傾向がある。これらの新移民は生活の中で英語を使うことは限られ、外部からの知識、情報も入りにくい。スペイン語のエスニック放送はこれらの人たち向けにAIDS/HIVの教育をする上では、もっとも最適な方法であろう。

日本での予防措置や教育に関しても、国際化が進み、多様な人種が増加している現在の日本で、今までのような一律な問題解決法だけでは予防、治療が追いついていなくなるだろう。日本で増えている外国人のAIDSケースの削減、ひいては日本人の間の予防対策として、日本語だけでなくほかの言語での徹底した予防や教育の必要性に迫られてくるであろう。

さらに、日本人に関しては、安全なセックス(safe sex practice)に関する調査とそれを踏まえた上での予防や教育が必要であろう。日本人はメキシコ系アメリカ人に比べて、AIDS/HIVに関しての知識をもっているようだが、それが適切に使われているとは限らない。まして、最近の20歳、30歳台の人の間での感染が著しく増加し、感染ルートも薬害からの感染から異性間の性交渉へと移行している事実からみて、特に若い人たちにむけた安全なセックスに関する教育は必須のものとなってくるだろう。

#### 引用文献

- Aruffo, J., Coverdale, J., & Valbona, C. (1991). AIDS knowledge in low-income and minority populations. *Public Health Reports*, 106(2), 115-119.
- Center for Disease Control (1995). *Facts about HIV/AIDS and race/ethnicity*. December, 1-5.
- Diaz, T.; Buehler, J.W.; Castro, K.G.; & Ward, J.W. (1993). AIDS trends among Hispanics in the United States. *American Journal of Public Health*, 83 : 504-508.
- Epstein, J.A., Dusenbury, L., Botvin, G., & Diaz, T. (1994). Acculturation, beliefs about AIDS, and AIDS education among New York City Hispanic Parents. *Hispanic Journal of Behavioral Sciences*, 16 -3 : 342-345.
- エイズ患者最高の250人。(1998, January, 28). *読売新聞*, p. 12.
- Flaskerud, J. & Nyamathi, A. (1990). Effects of an AIDS education program on the knowledge, attitudes and practices of low income black and Latina women, *Journal of Community Health*, 15(6) : 343-355.
- 保険衛生ニュース* (1996). 850, 12-13.
- Kaplan, M. (1995). Feminization of the AIDS epidemic. *Journal of Sociology and Social Welfare*, 17: 5-21.
- Maril, R.L. (1989). *Poorest of Americans : The Mexican Americans of the lower Rio Grande Valley of Texas*. Nortredame, Indiana: University of Nortredame Press.
- McCoy, C. B. & Inciardi, J.A. (1995). *Sex, drugs, and the continuing spreading of AIDS*. Los Angeles : Roxbury Publishing Company.

- Rapkin, A. & Erickson, P. (1990). Differences in knowledge of and risk factors for AIDS between Hispanic and non-Hispanic women attending an urban family planning clinic. AIDS, 4 : 889-899.
- Romero, G. & Arguelles, L. (1993). AIDS knowledge and beliefs of citizen and non-citizen Chicanos/Mexicans. Latino Studies Journal, September : 79-94.
- Schneider, B.E. & Stoller, N.E. (1995). Women Resisting AIDS. Temple University Press.
- Stein, Z.A. (1995). Editorial: More on women and the prevention of HIV Infection. American Journal of Public Health, 85 : 1485-1488.
- Sweat M. & Levin, M. (1995). HIV/AIDS knowledge among the U.S. population.
- Wright, E.R. (1991). Social construction of AIDS. In Pescosolido, B.A. & Write, E. (Eds.) The sociology of AIDS : Six lectures and materials for Instructors and Students. DC, Washington : American Sociological Association : 19-48.